

ハイスクールすぐ死ぬ
旧タイトル: 駒王新横浜
協奏曲

鳩胸な鴨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然、『吸血鬼が一般的に認知されている世界』と『悪魔などの人外が秘密裏に動く世界』の『新横浜』が入れ替った。

※この小説は下品です。

本作は『吸血鬼すぐ死ぬ』の布教のために書いているので、興味を持ってもらえると幸いです。

本作は『吸血鬼すぐ死ぬ』が濃いため、『ハイスクールD×D』のイメージを損なう恐れがあります。

目次

新横浜のパニツク

プロローグ「吸血鬼クロスオーバー大

好き」
1

襲来、謎のパケモノ
11

悪魔
31

大パニツク
39

新横浜のパニツク

プロローグ 「吸血鬼クロスオーバー大好き」

「お、終わった……」

新横浜にある、とある事務所。

その主たる人物：ロナルドは、パソコン画面を前に、倒れ込むように机に突っ伏した。その画面に綴られた文字列の内容は、『ある存在との戦闘』を描いたものになっている。

ロナルドは腱鞘炎で痛む手で、その文字列を出版社のメールアドレスに送る。

「たっだいまー！終わったー？」

仕事疲れと達成感が入り乱れた感情の余韻に浸る暇もなく、細身の男が事務所の戸を開く。

ニコニコと笑う男の手には、新作ゲームの類が入ったビニール袋がぶら下がっていた。

「テメエ、終わった直後でよかったな。」

書いてる途中だったら、問答無用で殺して、テメエの塵を肥料にして農業始めてたわ」

「目を追うことに死んだ私の活用法を見出すの、やめない?」

細身の男: 『高等吸血鬼』ドラルクは、冷や汗を流しながらツツコミを入れる。

ロナルドは相手する気にもなれないのか、パソコンの電源を切り、ソファに寝そべった。

と、その時。ソファに置いてあったリモコンが、ロナルドが寝そべった勢いで飛び出す。

放物線を描いたソレは、ドラルクの足の小指に激突した。

「ぐはあっ!?!」

瞬間。ドラルクの体は塵となった。

『死』を迎えたのだ。

死因は『リモコンの角が足の小指に激突した』という、非常に下らないものだったが。

ドラルクの死を目の当たりにしたロナルドは、その死骸に近づく。

「相変わらず弱えな。リモコンくらい避ける」

「し、仕方ないだろう!?!私だってきつっきのは予想外だったんだし!!」

ロナルドの声に反応するように、塵は再生を始め、ドラルクの形へと戻る。

そう。何を隠そう、この『ドラルク』という吸血鬼、『弱い』のだ。

小学生にバカにされただけでも死ぬし、ゲームの音量がデカすぎても死ぬ。

イヤホンの感触が硬くても死ぬし、軽いチョップだけでも死ぬ。

すぐに復活はするものの、数秒も経たずにまた死ぬなど、日常茶飯事だ。

「追い出してエ……。でも、追い出したらロナルドウオー戦の続きが……」

ロナルドは頭を抱え、深いため息を吐いた。

彼は『吸血鬼に対抗する傭兵』：要するに『吸血鬼退治人』なる職に就いている。

激しい人気競争に勝ち残る手段として、自伝『ロナルドウオー戦記』を出版している作家としての顔も持つ。

ある仕事を引き受けた彼は、成り行きでドラルクと同居する羽目になってしまった。

追い出そうにも、ロナ戦：ロナルドウオー戦記の略：の人気の要たる存在となったドラルクを追い出せば、担当編集者に殺される。

そんなわけで、渋々と同居生活を続けているのだ。

「……う・あれ？　そういうやジョンは？」

ロナルドが視線を右往左往させ、ある存在を探す。

ドラルクは気の毒そうな顔で彼の尻を指した。

恐る恐るロナルドが視線を向けると、そこには……。

「又っ……。ヌー……。っ」

ロナルドの尻に潰され、更にはソファに埋れて窒息寸前のアルマジロが居た。

そこには、全裸の『X』のような形の覆面を被った男が、こちらを見つめてる姿があった。

「あいつみたいなの？」

「ああ。振り切ったから大丈夫だと思う」

「そうか」

ロナルドはそう答えると、大きくあくびをして、ソファに腰掛けた。

「明日探して退治するか」

「そうだな。私も買ったゲームやりたいし」

あはは、と互いに笑う二人。

しばらく笑っていた二人の顔からは、だんだんと笑顔が消え失せていく。

「……ロナルド君。セーので、もっかい見ない？」

「わかった。……セーのっ！」

二人がもう一度窓の外を見ると、恥部を全面的に曝け出し、こちらを見下すように見

新横浜は光に包まれた。

◆?◆?◆?◆?

ヨーロッパ圏にある、とある館にて。

優雅に紅茶を嗜む男性…ドラルクの父、『ドラウス』は、何気なしにテレビをつけた。

「なんか面白いのやってたっけなあ…?」

ドラウスがチャンネルを吟味していると、あるニュース番組に目が留まる。

「新横浜?何かあったのか…?」

テロップにある『新横浜』の字につられ、ドラウスはニュースに食らいつく。

テレビの画面には、変わらないようであり、圧倒的に様変わりした新横浜が映っていた。

『なんとということでしょう!妙な光に包まれた直後、新横浜が変わってしまいました!』

これは一体、どうということなんでしょうか!

ナン・モシラーネ博士!』

『知らね』

ニユースキャスターと白衣の男性のやり取りの傍ら、ドラウスは卒倒した。

襲来、謎のバケモノ

『新横浜の異変』から3日が過ぎた。

若干心配になるほどの速度で、世界は『新横浜が変わった世の中』に順応した。

なんでもロナルドたちの世界の神奈川県警のトップが、偶々妹に会いに来てたらしい。

そのため、騒動に巻き込まれ、混乱を鎮めるために警察本庁へと向かったのだとか。

『結果、吸血鬼のいない平和な世界の新横浜と入れ替わったことが判明。』

吸血鬼対策センターは、原因の吸血鬼を捕まえるも、「俺じゃ戻せん」と供述……だつて」

新横浜にて広く活動する情報誌を手に、ドラルクがロナルドに読み聞かせる。

ロナルドはというと、暇を持て余していたのか、ジョンと「だるまさんがころんだ」をして遊んでいた。

「だるまさんが……ころんだっ！」

「又っ!」

「君たち、聞いてた?」

「よし、もう一回行くぞー!」

「ヌー!」

「聞いてないなコレ」

完全に「だるまさんがころんだ」に夢中になっている二人に、ドラルクは呆れたため息を吐く。

同時にオープンから「ビーっ!」という音が鳴り響いた。

「おやつ出来たから、そこまでにしたら?」

「そうだな。いやー、久々にやると面白いな!だるまさんがころんだ!」

「ヌーっ!」

「ロナルド君、こっちに来てから大分残念になったよねぶふうっ!」

ドラルクが小馬鹿にするように言うと、ロナルドの拳が腹に突き刺さる。

無論、ドラルクがその攻撃に耐え切れる筈もなく、あっさりということ切れた。

「誰が残念だコラ。テメエも年がら年中ゲームやって引きこもってた残念だろうが」

「いや、いい歳して仕事中に『だるまさんがころんだ』に熱中する人に言われたくないんだけど」

「うっ……」

言い返す言葉がないのか、言葉に詰まるロナルド。

と、その時。床の一部がパカリと開いた。

「おい、ロナルド」

そこから現れたのは、まだ少しあどけなさの残る少女だった。

ロナルドは開いた床になんの反応も示さず、その少女に向き直る。

「ヒナイチか。そろそろおやつだから、来ると思ったぜ」

「おお！今日はなんだ!?!」

「ヒナイチ君も、こっち来てから完全にただおやつをたかりに来る人だよね」

いつの間にやら皿に盛り付けたフィナンシエの山を手に、ヒナイチの隣にしゃがみ込むドラルク。

ヒナイチは一心不乱にそれを頬張りながら、口をモゴモゴと動かした。

彼女は警察に設けられた、吸血鬼が起こす事件を担当する『吸血鬼対策課』の一人である。

元々は超エリートだったのだが、ドラルクとの出会いにより、その道を順調に転がり

落ちている最中である。

「ひふはひゆうふえふひっほいほははふひふはへへは」

「ほふはほは？」

「はは。ひはほへはひふはへへふ」

「ほひやは、ほへはひほへはふはは」

「口にモノ入れながら会話しない……って意味通じてんの!？」

口にフィナンシエを、これまたたつぷりと頬張りながらの会話。

以前ならロナルドがツツコミを入れていたはずなのだが、何故か意味が通じ合っていないらしく、会話を続ける始末。

二人は頼いっぱいにフィナンシエが入ったまま、ドラルクに手を伸ばした。

「ひゆふひゆふ」

「いや、なんて？」

「ひゆふひゆふ」

「せめて飲み込んでから言ってくんない？なんなの？なにか欲しいモノでもあるの？」

「ひゆふひゆふ」

「……牛乳？」

「「ふふ」」

ニュアンスからなんとなく聞き取ったが、「牛乳」で正解だったようだ。

まるで全く話の通じないクレーム客と話しているような、なんとも言えない不快感。

ドラルクはこめかみに青筋を浮かべながら、冷蔵庫からパックの牛乳を取り出し、二つのコップに注いだ。

「ほらー」

ドラルクが二人にソレを渡すと、二人はコップを呷り、牛乳を飲み干す。

口の中のフィナンシエとともに飲み込んだのだろう。

二人は「ごくんっ」と喉を鳴らした。

「そういうことだ。私は本部に戻る」

「おう、わかった」

「いや待って!?!話が全然見えないんだけど!?!」

ロナルドが手を振る傍ら、ドラルクが大声で帰ろうとするヒナイチを呼び止める。

「なんだ、聞いてなかったのかドラ公」

「聞いてなかったというより聞き取れなかったんだ!!」

あんな翻訳しろつつつたら、翻訳の人キレて監督に殴りかかるわってロナルド君はボケに回るな!!

私、基本はボケなんだぞ?!」

ドラルクの抗議が受け入れられたのか、ヒナイチは「やれやれ」と肩をすくめ、床から這い上がった。

「仕方ない。要点だけ話してやろう。」

新種の吸血鬼っぽいのが確認されてな。

また変なのだろうなって思ってたんだが、死傷者が出始めたことから、本気でヤバイヤツつてことが判明した。

既に退治人組合の方にも報告してある。

お前たちも気を付けろ……と言ったんだ」

「死傷者……?」

死傷者という言葉に反応したドラルクは、軽く小首を傾げた。

「おかしいな……。吸血鬼は基本、致死量は吸わないはずなんだが……」

「基本だろ? 吸い尽くす奴も居るんじゃないか? 脚高とか……」

「アレは超希な例外だ。人間だって、たまにとんでもない偏食家が居るだろ」

ドラルクはそう語ると、言葉を続けた。

「食事で人間を絶滅させたら、食糧が少なくなるって理由でこつちが困る。」

だから、吸血鬼の間では『吸い尽くす』という行為は……人間で言うなら……そうだな。

『ケツの穴に生花ぶち込みながら全裸でイナバウアーを披露する』つてレベルで恥ずかしい行為として浸透してる。

まあ、脚高みたいに守らん奴も、居るには居るが」

「よくわからんが、恥ずかしいってことだけはわかった」

人間なら黒歴史なんてモノじゃない。

吸血鬼にとつて『血を吸い尽くす』という行為は、『末代どころか歴史の汚点として名を刻まれるレベルの恥』なのだろう。

そのことを理解したロナルドたちもまた、ドラルクと同じように首を傾げた。

「ヒナイチ、なんか聞いてるのか?」

「いや……。私も『死傷者が出た』としか聞かされてなくてな。

捕獲を試みた半田も、あっさりと返り討ちにされた」

「はあ!」

半田とは、ロナルドの高校の同級生であり、吸血鬼対策センターの職員の一人である。ヒナイチの同僚でもある彼は、『ダンピール』という吸血鬼と人間のハーフだ。

アスファルトを破壊し、落とし穴を掘る程の怪力を誇る彼が、あっさりと返り討ち。

半田の実力を知っているからこそ、二人は驚愕したのだ。

「大事にしていた母親からのバレンタインチョコを、戦いの途中で落とし、しかも自分で踏んでしまったらしくてな。」

今は口も聞けないほどに落ち込んでる」
「ちよつとでも心配した俺がバカだった!」

相変わらずのマザコンぶりだった。

聞けば、母親に相当申し訳ない思いを抱いたのか、ブツブツと「お母さんごめんなさい」と繰り返してららしい。

たかが安物の、しかも2ヶ月も前の板チョコ。

しかも、母親からのバレンタインチョコ。

それだけでここまで落ち込めるとは、ある意味才能なのかもしれない。

「ロナルドを名前を出しても、全然反応しない始末だ」

「重症だな」

ロナルドのストーカー…本人曰く「全力でバカにするために、ロナルドのことを知ろうとしている」…の半田が、ロナルドにも反応しない始末。

傷は深いようだ。

「取り敢えず、ドラ公に探させるのが一番じゃないか？死んでも復活するし」
「へ？」

「ああ。そう思つて、ここにこの情報を流しに来た」

「イヤアアアアアー……ツツツ?!?!」

二人とも目が本気イイイイ……ツツツ?!?!」

まさか自分に白羽の矢が立つとは、微塵も思つてなかったのだろう。

フィナンシエのあつた皿を、台所まで持つて行こうとしていたドラルクは、一部が砂になりつつあつた。

「イヤだぞ!!人間でも死ぬレベルの攻撃なんか食らつたら、凄く痛いだろうが!!

すぐ死ぬ割には、痛覚も普通にあるんだぞ私は!!」

「凄く痛いぞ済むんなら安いじゃねーか」

「ぐっ……、ううっ……」

感性は人間寄りなドラルクは、ロナルドの言葉に反論できなかつた。

このまま死地に赴く他ないのか。

二人分の重圧を前に、死にかけてたその時だつた。

「ヌーっ」

「ジヨ、ジヨン……!」

「くそつ、ロナルド君め……。私が死んでも復活するからって外に放り出して……」
その日の夜、新横浜のある裏路地にて。

ロナルドは兎に角、ジョンの視線に耐えきれなかったドラルクは、渋々パトロールに出していた。

流石に死傷者が出たためか、外に出ている人間は少ない。

居るのは、吸血鬼たちだけだ。

「……どつか寄って避難しようにも、軒並み閉まつてるなあ……」

退治人組合も、なんかデカい仕事があるって追い返されたし……」

ドラルクがありもしない哀愁を漂わせていると、ぐちやり、と音が響く。

ホラーゲームの音声でよく聞く、肉が潰れるような音。

誰かがホラーゲームでもやってるのか。

そう思いながら、ふと足元に視線を向けたドラルク。

「……………血？」

匂いでわかる。

これは、自分たちの食糧だ。

こどもも地面にぶち撒けられているということとは、大怪我を負った者がいるということ。

つまりは、件の吸血鬼も、この近くに存在すると言うことだ。

「どつ、どつ、どつ、どつ……？」

ロナルド君に知らせ……いや、ヒナイチ君に直接報告したほうがいいのか……？」
極度の緊張で死にかけてるドラルクは、砂になりつつある手で携帯を取り出す。
ガタガタと震える挙句、砂になっているため、うまく画面がタップできない。
かれこれ5分ほど奮闘したドラルクは、なんとかロナルドへと電話を繋げた。

「も、もしもし……？」

『おつ、見つけたか？』

「いや、それっぽい痕跡はあったんだが……」

コレ、吸血鬼じゃなくて殺人鬼とかじゃないの？それくらい血がぶち撒けられてるし、同胞の匂いが微塵もしないんだけど」

吸血鬼は匂いで同胞を探すことができる。

しかし、地面に広がる赤の水たまりから発せられる匂いがカモフラージュになっているのか、ドラルクは同胞の匂いを感じ取れない。

こうなれば、吸血鬼か、はたまたイカレた人間かの区別もつかなくなる。

『は？吸血鬼じゃない？じゃあ、普通に警察案件か？』

「わからんが、私はもう帰るぞ。イカレ野郎だったら、私なんて格好の的だろう」

逃げようにも腰が抜け……もとい再生できないでいるドラルクは、まさに絶体絶命の窮地に立たされていた。

————絶技『ブロッサムスピア』!!!

ドラルクが本気で死を覚悟したその時。

野太い声が響き渡り、緑の槍がバケモノを吹き飛ばす。

砂埃に隠れた槍の持ち主は、シルエットからもわかるように、筋骨隆々とした男。

『なっ、なんだ、お前はっ!!』

男に向けてバケモノが問う。

それに応えるかのように、シルエットは砂埃を薙ぎ払った。

「我はこの同胞と同じ、高等吸血鬼……」

たなびくマント。ゼラニウムの香り。

鋭い眼光に、気品に満ち溢れたオーラ。

そこに居るのは、まごうことなき吸血鬼。

「下がっている。今、吸対、そして退治人たちがこっちに来ている。それまで私一人で持ち堪えて見せよう」

「それはいいけど尻ーーーーーッッッ!!」

尻こっちに向けないでエエエエエーーーーーッッッッ!!!」

見たくもない漢の尻のセクシーヌードが、目の前にあるこの状況。

誰だろうと死にたくなる。というより、ドラルクはこのショックで死にかけてる。

『ええい汚らわしい!!』

「ぐはああアアアーーーーッッ?!!?」

「完全な出落ち役じゃないかゼンラニウムさアアアアアーーーーんッッッ!!!」

格好はとにかく、戦力面では頼りになりそうだった味方がワンパンで吹っ飛ばされた。

新横浜を彩るお星様と化したゼンラニウムを、二人はただ見つめる。

聴てその姿が見えなくなると、バケモノはドラルクに向き直った。

「あつ……。じゃ、じゃあ、帰りますねー……」

『待て。お前をサンドバッグにしてないぞ』

「ウワアアアアアアア忘れられてなかったアアアアアーーーーッッッ!!!?!!?」

とんでもないアクシデントがあつたのだ。

これを利用し、うやむやにして逃げようという魂胆は、見事に露呈した。絶体絶命再び。

走馬灯まで見えて来るレベルのプレッシャーに、完全に砂になるドラルク。バケモノはその姿を見て、ニヤニヤと笑いながらビニール袋を取り出した。

「ビニールでやるの!?!破けるよ絶対!!」

『安心しろ、防護魔法はかける』

「なんでそんなに私をサンドバッグにするのにガチなの!?!」

『訳のわからんヤツに電化製品が如くこき使われた挙句、抗議したらこんなバケモノにされてムシヤクシヤしてるんだよ!!』

「八つ当たりじゃないか!!」

八つ当たりで素人が作ったサンドバッグにされる運命にささやかな抵抗をすべく、ドラルクはツツコミを入れる。

しかし、バケモノはそれを意に介さず、ドラルクの砂を掬い上げようとした。

『うるさい!お前にわかるか!!』

急に家が家族ごと爆発したり、なんか訳のわからんヤツにこき使われ、抗議した挙句変なバケモノにされる気持ちだ!!』

「なんか前半部分だけ共感できる気がする」

なんとという因果だろうか。

クソガキが巻き起こした騒動によって、家を失い、ロナルドの家に転がり込んだはいが、家政婦生活を強いられたドラルク。

ある理由で家を失い、奴隷生活を強いられたバケモノ。

一方的ではあるが、ドラルクはバケモノに一種のシンパシーを感じた。

『おまけになんでか殺人犯呼ばわりされるし!!無実を訴えようにも皆逃げてくし!!』

このやりようのない怒りを向けたくて、人間じやないヤツ見つけてボコろうって思ってたんだよ!!』

「どうしよう、なんか凄く可哀想に思えてきた……って、無実?」

おかしい。

このバケモノが言うには、彼は誰も人を殺していない。

なのにも関わらず、この場に鉄臭い液体がぶち撒けられている。

「この血はなに?」

『ストレスで咯血したんだよ!!』

病院行っても追い返されるのがオチなんだよクソツタレ!!!』

「ああ、うん……」

血の主人はまさかのまさか、目の前のバケモノだった。

不憫すぎる運命に、ドラルクはサンドバッグにされかけているというのに、憐憫の念を抱く。

「見つけたぞ」

その瞬間。

ドラルクたちの居た地面が爆発した。

妙なものだった。

人間に取って付けたかのような、蝙蝠の翼が生えた異形。

同胞かとも思ったが、変身能力の制御はかなり困難なはず。

それこそ真祖レベルの存在か、はたまた初めから『翼が生えた生物』でない限り、絶対に有り得ない状態だ。

同胞の匂いがないことから、後者であることは簡単に分かった。

『おい、砂!!聞いたろ!!アイツだ!!』

アイツが殺人犯のイカレ野郎だ!!』

「うん。あの言動、立場利用して好き放題やるドラ息子タイプのコサイコだな」

なんとか再生したドラルクは、冷静に目の前のイカレ野郎を分析する。

その本人はというと、再生したドラルクに少し目を剥いたものの、すぐに興味を無くしたかのように視線を逸らした。

「君、マジで無罪だったのか……」

殺してそうな見た目で、ホラゲチックに登場しといて」

『見た目は兎に角、気さくに話しかけようとしたら、声の上擦っちゃったんだよ!!』

まあ、そのおかげでお前が人外ってわかったけどな!!』

意外とドジっ子なのだろうか。

バイ〇ハザ〇ドに住んでそんな見た目のくせして、何処に向けた萌え要素なんだ。ツツコミを入れようとしたが、ドラルクはあることに気づき、止める。

その視線の先には、ボソボソと何事かを呟くイカレ野郎の口があった。

「なんか呟いてる……?」

『詠唱だ、来るぞ!!』

バケモノが叱責するや否や、再び地面が炸裂した。

「ぐはあ!」

『ぐうっ……!』

受け身を取ったバケモノは、苦虫を噛み潰したような顔でイカレ野郎を睨みつける。

一方、ドラルクは音にビビって死に、すぐさま復活した。

「君、強そうなんだから反撃したらどうなんだ!? さっきからやられっぱなしだぞ!」

『あんなバケモンに勝てるか!!』

ドラ〇エの魔物で言ったら、アイツがドルマ〇スで、オレはトルだぞ!』

なんとも分かりにくい例えだ。

しかし、ドラルクは極度のゲーム脳。

それがどれだけ無謀なことか、彼は完全に理解し、絶望した。

「ウワアアアアアア100%死ぬウウウウウー……ツツツ!!!」

『お前はさっつきから死んでるだろ!!』

「コントはそこまですて、さっつきと死んでもらおうか!!」

イカレ野郎が再び詠唱を始め、地面が赤く光り始める。

おそらく、先ほどよりも高威力なもの。

復活するドラルクは兎に角、バケモノにとっては絶体絶命のピンチ。

せめて詠唱の邪魔を出来ればよかったのだが、相手が空を飛んでる時点で詰み。

『クソオ……っ!』

バケモノが怒りを込め、地面を叩いた瞬間。

「私は殺生を見るのは嫌いなんだ」

声が響いた。

ただそれだけ。ぼんやりと光がイカレ野郎を覆うものの、詠唱が止まることはない。

詠唱も完成し、最早これまで。

バケモノは死を覚悟し、目を瞑る。

「ふはははは!!」

金髪少女のヘソにしやぶりつきたいイイイイイーッッッ!!!」

聞きたくもない性癖が暴露されるまでは。

詠唱も完成していなかったのか、地面の光はすっかり収まり、炸裂することはなかった。

あまりに可笑しい状況に、バケモノは啞然と口を開けたまま、放心する。

「なっ……?!?金髪少女のヘソのゴマを食べたい……!!」

「ふふふ。我が術中に陥った者は、Y談しか話せなくなる……」

カツン、カツン、と革靴が地面を叩く音が響く。

二人がそちらを見ると、初老の男性が笑顔を貼り付けながら、イカレ野郎の様を嘲笑っていた。

「君のようなレベルの高い性癖は、私も初めて聞いたがね」

「わ、Y談おじさん!!」

その名は、『高等吸血鬼Y談おじさん』。

彼の放つ『Y談波』は、当たった者の放つすべての言葉を『Y談語』にして変換させ、『性癖を暴露させる』。

魔法を使う者相手には、無敵の吸血鬼。

「くっ……、金髪少女のヘソのアカをペロペロしたい……!!」

「君がどれだけ偉いかは知らん」

「ぐうっ……!!」

『なに?今ので会話成立してたの?』

「Y談おじさんは、Y談語を理解できるんだ」

何もかもが理解できない。

Y談語という単語も、イカレ野郎のハイレベルな性癖も。

ただ分かることと言えば、嫌でも性癖を暴露することの羞恥や屈辱のみ。バケモノは哀れな姿のイカレ野郎に、憐憫の眼差しを向ける。

『それはそうと、苦勞しそうな性癖だな』

「理解者も薄い本も少なそうだ」

「金髪幼女のヘソオオオオオオオ………ツツツ!!!」

鬼のような形相で睨むも、怒号の内容が内容のため、全く怖くない。

声量が声量だったためか、ゾロゾロと見物人も集まり始める。

「なんだあれ？」

「ヘソ変態だ！」

「やーい！ヘソヘンターイ！」

「金髪幼女のヘソが好きイイイイイイイイイ………ツツツ!!!」

尚も性癖拡散するイカレ野郎に、小学生が馬鹿にし始めた。

高等人民が着るような服、尚且つかなりの悪人ヅラ。

そこから放たれる、ハイレベル過ぎる性癖。

馬鹿にされない訳がない。

いや、最早馬鹿にされるためだけに生まれてきたようなモノである。

しかし、流石は魔王というべきか。

吹き飛ばされたドアは容易く弾き飛ばされ、冥界の空を彩るお星様となった。

ドアを吹き飛ばした張本人：古参のドジっ子メイドは、何かを握りしめながらサーゼクスに詰め寄る。

「大変ですよ、サーゼクス様ア!!」

「大変なのは君だよね？」

ドア吹き飛ばすって、完全に殺す気だったよね？」

「へ？」

「うーん、見事なまでの無自覚ドジっ子」

言っても無駄だ。

説き伏せようにも数百年はかかるな、と一人呟き、サーゼクスは眉間を抑えた。

「そんなことより、この新聞を見てくださいよ!!」

「そんなことって、主人殺しかけておいてよく言えるよね」

流石にドアが突き刺さった程度では死なないが、心臓に悪いのは確かだろう。

悪魔でも人間でも、ストレスで体を壊し、拳句死ぬというのはよく聞く話だ。

このメイド、クビにした方がいいのでは…？

そんなことを考えながら、サーゼクスは渡された新聞に目を通す。

『オータム新聞』……?聞いたことない新聞社だな」

「そつちじゃなくて、見出し!!」

「見出し……?」

サーゼクスは言われるがままに、新聞の見出し部分に目を向ける。

「……………は?」

そこには、大々的に『神々は実在した!?!衝撃!!人外だらけの社会!!』と書かれていた。

◆?◆?◆?◆?

世間は『人外』と呼ばれる存在を、いとも簡単に信じた。

ソレも無理はない。

ついこの間、『新横浜が入れ替わる』という怪奇現象が起きたばかりなのだ。

更に付け加えるなら、役所に勤める人間たちにより、『戸籍の数と人口が合わない』という問題が数年前から深刻化…。

トドメに『人間の記憶を弄るような存在も居る』ということが暴かれたことにも原因

があつた。

隠蔽しようにも、『オータム新聞社』の記者がアレやこれやと人外による問題を暴いていく。

無論、人外らは血眼でその記者を殲滅しようとするも、全滅。

割り当てられた全ての人員に、海よりも深く、スター○オーズのダー○サイドよりも闇がタツプリなトラウマが刻まれた。

社会問題にまで発展したソレを止める術は、人外たちには最早存在しなかつた。

◆?◆?◆?◆?◆?

「情報提供、ありがとうございます」

「いいいいいつ、いええええ、こここここのてて程度、なななんてこつととないつすよよよよよ!!」

ロナルドの事務所には、一人の来客が居た。

男にしてはサラリとした長髪。

眼鏡がより映える、知的な顔立ちにビジネススーツ。

そして、それら全てを台無しにする『バトルアックス』。

「……フクマさん、なんでここに居るの？」

「オータム社の社員は、新人研修時に時空転移の取得を強要されますので」

「ソレ出版社員の必須スキルじゃないよね絶対」

彼こそ、ロナルドたちの恐怖の象徴。

世界最強……いや、『最恐』であり『最凶』の出版社『オータム社』のエリート。

その名も『フクマ』である。

「この度、この世界に『オータム新聞社』を設立することになりました。

そのデビュー記事として、いいネタになりました」

『お、お役に立てたなら、何より……』

先日の感謝を伝えるために訪れていたバケモノ……『鳥羽』は、フクマの笑みに苦笑いを返す。

その視線は、どう考えてもフクマには似合わないバトルアックスに向けられていた。

『ねえ、この人何？めっちゃ物騒なんだけど……？』

「彼はフクマさん。ロナルド君の自伝、『ロナルドウォー戦記』の担当編集者だ」
『おつかしいなあ……？俺、耳が遠くなったのかな？』

編集者って、あんな殺意MAXなバトルアックス持つてるモンだっけ……？』
無論、違う。

鳥羽の常識は、何一つ間違っていない。

この新横浜があつた世界がおかしいのだ。

あの世界は、『編集者は何かしらの武術を嗜み、作家たちに圧力を掛けることに長けていなければならない』という常識がある。

『オータム社』は、まさにその最高峰と言っても過言ではない超大手。

作家たちへの殺意なら、他の追隨を許さぬ程に武術に長けているのだ。

このことを全く知らなかったドラルクとロナルドは、過去に幾度となく痛い目を見ているが、それは別の話としておこう。

「ツツコミたいのはわかるが、我慢しろ。

逆らえば、鳥羽君のミニ鳥羽君と永遠のお別れになるぞ」

『怖いこと言うなよ……。俺まで目エつけられたらどうなるかわかんないんだから……』

謝って書いたらいじやないスカ』

「鳥羽君。君はこの後どうなるか知らないから、そう言えるんだ」

ドラルクが言うや否や、フクマはバトルアックスを立てかける。

倒れないことを確認した後、事務所の戸を開け、あるモノを引きずってきた。

女神のような顔の銅像。

一見すれば、芸術品として評価されそうなソレだが、見世物とは違う用途がある。

「メイデンだ」

『は?』

「針はないが、パソコンはあるあのメイデンにブチ込まれて、書けるまで出てこれない」

その名は『アイアンメイデン』。

処刑用具として使われ、今や『作家への仕置き道具』として、オータム社で愛用されている代物である。

パソコン以外何もない空間で、黙々と書かなければ永遠に出れない。

